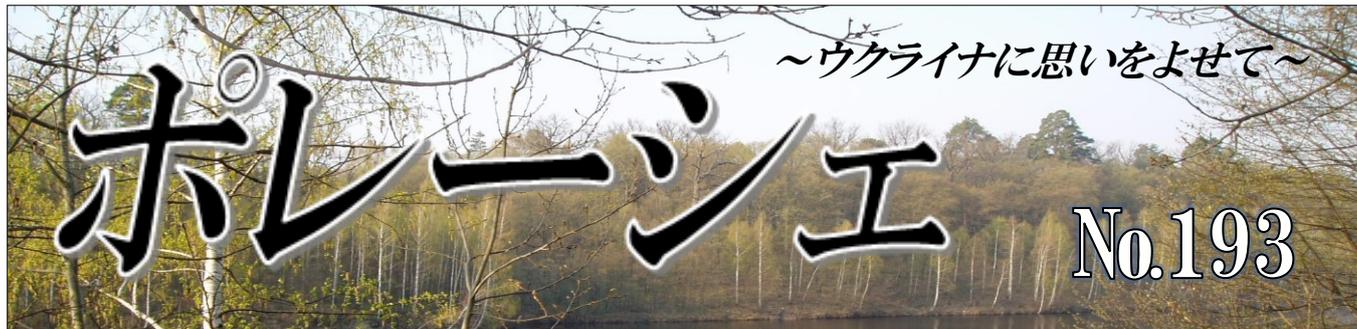


「ポレーシェ」とは、チェルノブイリ付近の湖沼低地帯の呼称です。



2023年2月15日発行 特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部

≪暗闇を照らすろうそく*ウクライナに灯りを届け隊≫

本堂に灯されたろうそく 残り火とメッセージを

「暗闇におびえる人々のところに届けたい」

～ウクライナ支援 灯りをとどけ隊 寺院有志の会～

Ukrainian Support AKARI WO TODOKE TAI Temple Volunteer Association

結城道哉



昨年2月24日、初孫に恵まれた日でした。まさかのロシア軍、ウクライナと交戦のニュース、引き続き(2022・3・2)NHK画面から耳目を疑うNEWSに言葉を失った。

ウクライナと交流30年支援続ける河田昌東さん、チェルノブイリ原発事故後30年間支援を続けてきたが、今回のロシア軍のウクライナ侵略戦禍のニュースに心を痛み、日本からの支援が中断している事態に憂慮されている。「たった今、新しいメールが入った。支援してきた“成人病院”がミサイル攻撃を受けた模様だ。」TVに心臓が激しく動悸し思わず、下記のメールを送りました。

『前略 NHKニュースを拝見しました。NPOの皆様の「戦禍に苦しむウクライナの人たちに何ができるか。」と嘆きつづやかれた河田昌東さんのお心が、胸に響き「何かお手伝いできることがあるか。」と自問して周囲の方にも伝えておりました。同時に私のところに「その件について、お手伝いできれば」とお寺関係者や友人が「避難家族の受け入れ」を賛同してくれました。数日の間にもウクライナでは被害が拡大して多くの避難民のニュース、岸田総理の「難民受け入れ」のニュースなどに接し、下記のように動こうと決めました。

私たちは、仏教徒(Buddhist)として いかなる理由であれ 国家間の戦争に反対します
その戦争によって 苦しむすべての人々に 深い痛みと悲しみを持ちます

また人道的立場から 宗教宗派・政治信条を越えて 戦争渦中にある人々に心を寄せます 私たちは
微力ながら「いわれなき暴力から逃れ 故郷を離れる悲痛と 銃弾と 暗闇から解放され 安らぎの中に
住み、明日への希望を育まれる」 この人々への「安息の場所があること」を切に願うものです』

すぐさま河田さんは反応してくださいましたが、難民受け入れ対応に私の準備不足を痛感し、夏から秋、冬を迎えることになりました。

ロシアの戦争行為はクリスマスを迎えようとする12月もやむ心配がありません。河田さんから、ろうそくは闇を明るくするだけでなく極寒の中、ろうそく火でお湯を沸かしていると伺いました。止むに止まらず「お寺で使用されたろうそく」を送ることにしました。



和ろうそくを受け取ったゼムリヤキの人々

呼び掛け「みなさまろうそくを送ってください。使用済、多少を問いません。汚れを落としビニール袋にメッセージカードとリボンを添えて届けます。」呼応して続々と集まり始めました。

12月21日「NPO法人チェルノブイリ救援・中部」事務局にお渡ししました。事務局からウクライナに届けてもらいます。

チェルノブイリ障がい者市民団体「ゼムリャキ」(キーウ)への支援を始める!!

36年前のチェルノブイリ原発事故でプリピャチ市から強制疎開となり、首都キーウで活動するチェルノブイリ被災者の互助団体「ゼムリャキ(同郷人たち)」(代表タマーラ・クラシツカさん)。現在、団体のメンバーたちは、戦渦の厳しい状況下で団体会員や戦争で占領された村人たちに、物資を配り励ましています。

私たちがジトーミル訪問の帰途、キーウの「ゼムリャキ」をお訪ねすると、子どもたちの合唱や温かい笑顔でもてなしてくださり、チェルノブイリ被災者の状況や問題等を話し合っただけで交流してきました。

彼らが、ミサイル攻撃等で命を脅かされる状況の中で、どのような思いで暮らしているのだろうと心配していました。せめて日本の市民からのクリスマスカードを届け、励ましたいと送ったところ、以下のお礼状が届きました。その後、皆様からの支援金を「ゼムリャキ」にも贈ることを決定しました。

個人的な(筆者)ことながら、2009～10年の半年間、「ゼムリャキ」で研修させていただき、その活動を間近で学び、事務所で一緒にランチを作ったり親しくしていただいた皆さんのご無事を祈り、日本の皆様からの支援を届けることで、これまでの交流の恩返しの一助になればと願っています。(戸村京子)

【クリスマスカード贈呈への「ゼムリャキ」からの感謝状】

親愛なる私たちの友人の皆さん、子どもたち、そしてキャンペーンのオーガナイザーの皆さん!

ウクライナの子どもたちとその親たちに代わって、すばらしい新年のキャンペーンに感謝申し上げます。

私たちの団体「ゼムリャキ[同郷人たち]」は、カードを孤児たち、子だくさんの家庭の子どもたち、敵に占領されていたプロスケ村の子どもたちに配布しました。子どもたちは喜び、折り紙をしげしげと眺め、そして自分たちも皆さんのキャンペーンに参加し、日本の子どもたちにやはり面白いプレゼントを作ってあげよう決めました。

この困難な戦時、子どもたちはまともに勉強したり学校に通ったりすることができません。というのも、授業中にしばしば空襲警報が鳴り響き、皆地下室や防空壕に移動するからです。戦争が始まった後、ウクライナに残った子どもたちには子ども時代というものはありません。

多くの家族は家を失いました一敵の爆撃のために。今日、国のエネルギーシステムは破壊され、毎日5～6時間は停電となり、また水やインターネット、集中暖房も止まってしまう。空襲警報が鳴り渡る時、すべての施設は営業を停止し、公共交通も止まり、皆シェルターに身を潜めます。毎日、爆弾が炸裂し、家々が崩れ落ちて地が揺れ動き、子どもたち、女性たち、高齢者たちが亡くなっています。でもウクライナの人たち、特に子どもたちは、屈することなく、私たちの守り手である軍人たちが勇敢に私たちの国を守るよう支援しています。これがウクライナの子どもたちの現状です。

私たちは、間もなく私たちが勝利を収め、平和な生活が戻り、太陽が輝き、鳥たちが歌い始め、そして子どもたちが恐れず学校に行ける日が来ることを信じています。(2023.01.18着信)



＝日々刻々と送られてくるタマーラさんからのメールの要約＝

2022年3月12日：(避難先のハンブルクから)『すべてはまるで悪夢の中でのように起こりました。2月25日から、私たちは避難の途上にありました。子どもを抱えた母親たちを避難させなければなりませんでした。ルーマニアで見ず知らずの人たちが私たちが泊めてくれ、ドイツの友人たちが私たちが連れに来てくれました。ここはとても静かですが、夜になると頭の中で空襲警報のサイレンが鳴ります。友人たちからウクライナのニュースを聞いて涙を流します。タマーラ』

3月27日：『ずっと泣き続けています。私は自分を裏切り者のように感じています。誰もが避難したがったわけではないので、キーウに残っている人たちがいるからです。息子はキーウ近郊で衛っています。占領されたスラヴチチの多くの友人たちが、ロシア人たちがしてかしている蛮行について語っています』

5月24日：『ドイツで医薬品やキーウの防衛隊の備品を買い付け、送り届ける活動をしています』

6月13日：『土曜日ごとにキーウに支援物資を発送しています』

10月27日：『私はもうキーウにいます。毎日、停電と断水があります。空襲警報が鳴ると、店の営業や団体の仕事もストップしてしまいます。インターネットの接続もしばしば途切れるため、業務に支障が生じます。非常に多くの孤児たちが、キーウの孤児院に連れてこられていて、その支援もしています』

11月1日：『お知らせありがとうございます。私たちのことを覚えていて、お祈りして下さっている方々がいらっしやることを幸せに思います。キーウの状況は困難になりつつあります。毎日毎晩、空襲警報のサイレンが響き渡ります。今朝は爆発音で目が覚めました。病院は負傷した兵士たちであふれていて、今日私たちは人道支援物資の医薬品を持って行きました。今週、住宅が爆撃され住民が戸外で暮らしている村に行きます。ビタミン剤と医薬品を配布しています。ヴォランティアたちは、兵士のために暖かい靴下とベストを編む予定です。プラン、仕事は多いのですが、メンバーたちが手伝ってくれています。多くのメンバーは避難先から自宅に戻ってきました。どの家族も、何らかの問題を抱えています。皆支援を必要としています。そして私たちは皆さんの支援にとっても感謝しています。

今日は8時から13時までと19時から21時半まで停電し、ネットも通じませんでした。お返事がなかなか届かない場合は、接続の問題だと思ってください。今残っているのは3人とその他ヴォランティアたち。戦争が私たちの友情をいっそう強いものにしました。互いに生き延びる手助けをしています。皆さん、いつもお元気で過ごしてくださいますように！』

11月15日：『緊急の停電で、エレベーターの中で4時間閉じ込められるのは本当に怖いので、9階まで歩いて上がることにしていて、時間がかかります。神のご加護と皆さんの祈りのおかげで、私たちのスペースは破壊を免れましたが、非常に多くの建物が破壊されています』

11月16日：『お返事の続きです。チェルノブイリ救援・中部のご支援に感謝します。今、私たちには切実に支援が必要です。皆さんお元気で、ご多幸をお祈りします』

2023年1月11日：『戦時中の物価高騰のため、人々は赤貧状態に陥っています。戦地からの移住者たちと、家やアパートを爆撃された家族のために、食品セットを購入しています。この人々は放棄された家屋に住んでおり、冬を越すのが非常に困難です』

1月24日：『どんなご支援も必要で、ご寄付は全て、人々が生き延びるための医薬品と食品の購入に使います』



支援物資配布中のタマーラさん(左)

ウクライナ緊急支援の1年

はじめに

2022年2月24日に突然始まったロシアによるウクライナ侵攻は1年経った今もまだ終わりが見えない。ウクライナのチェルノブイリ原発事故被災者を33年間にわたって支援して来た私達にとって、この度の戦争はウクライナの人々の命と未来を奪う許しがたいものである。この一年間の緊急支援を振り返り、多大なご支援を下さった皆様に感謝の報告をさせていただきます。(河田)

(1) 支援の始まり

ロシアによるウクライナ侵攻から3日後の2月27日に、「ウクライナ危機に関する緊急声明」を日本語、英語、ウクライナ語、ロシア語で発表。関係各国の大使館や外務省、これまで支援いただいた団体などに送った。以後、ロシアによるチェルノブイリ原発占拠や、永年お付き合いしてきた、ジトーミル25番学校や成人病院の爆撃などの情報が入り大きな衝撃を受けた。ウクライナの人々はチェルノブイリ事故の時と同様、医療機器や医薬品が必須となり、3月7日に緊急支援のお願いを全国に発し、支援を開始した。



3月4日の爆撃で破壊された25番学校

(2) 第一便はドイツ経由で物資を送る



戦争が始まると日本からウクライナへ救援物資を直接送る事は出来なくなった。偶然、私たちが永年支援して来たジトーミル州ナロジチ地区病院に、ドイツのNPO「アクション・チェルノブイリ」も支援している事が分かり、共同でウクライナ支援を始めた。

3月25日、医薬品など900Kgを積んでドイツを出発するアクション・チェルノブイリのメンバー達。右端が代表のJ.ツィーグラー医師。



第一便の支援で無事出産できた妊婦と赤ちゃん
爆撃を受けたコロステン地区病院にて

(3) 救援物資を受け取った人々



事故処理作業者団体のメンバー

粉ミルクを受け取った親子



元チェルノブイリ原発職員



産科病院に贈った出産用ベッド



ジトーミルに届いた第4便と運んだ消防士たち
(中央はY.ドンチェヴァさん)



ナロジチ病院に届いた第3便



手術用照明器具を受け取った
マルイン市立病院

ウクライナ緊急支援のまとめ (2022年3月～12月)

- 寄付金：個人 672 名、団体 65 団体
- 寄付総額：20,523,787 円
- 外貨送金：(10 回)：計 11,630,736 円
- 支援先：ナロジチ病院、州立周産期センター、小児病院、事故処理作業者協会、チェルノブイリ避難者団体「ゼムリヤキ」など 18 病院・団体
- 支援物資：医薬品、医療機器、車両・発電機など多岐にわたる

ウクライナ緊急支援報告会

開催のお知らせ

日時 4月15日(土)

10時30分～12時30分

会場 中部土木(株)ホール

(地下鉄東山線「上社駅」下車徒歩6分)

※詳細は、ちらし、HPをご覧ください

キーウを逃れて イリーナ・ペトリチェンコ

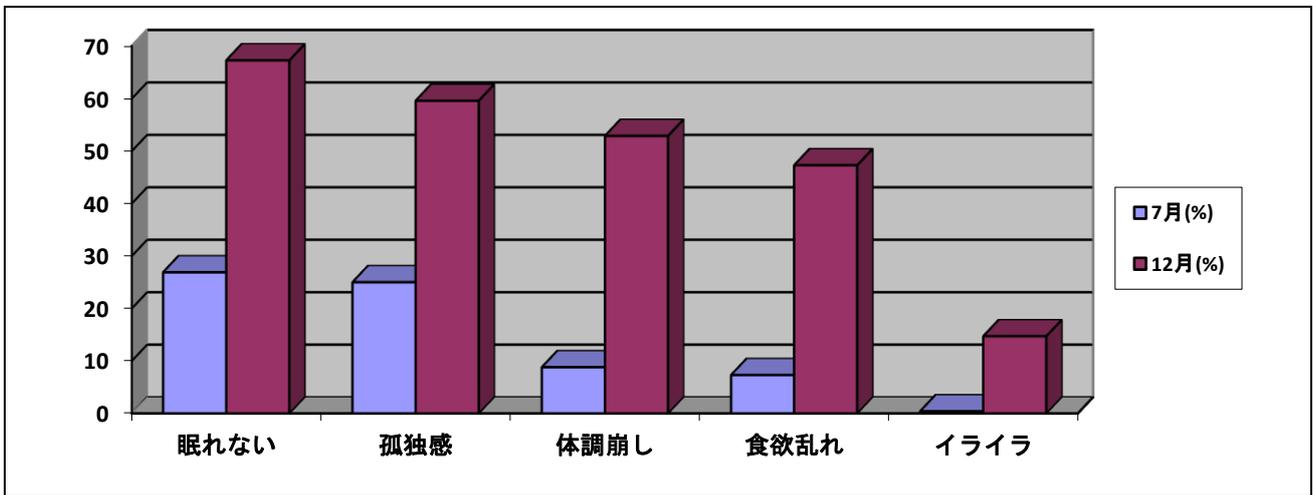


2022年2月24日の夜明けに今までの幸せな人生が終わった、と思ったりすることがあります。

このような感じ方は一見、事実を反映したものに見えますが、じつは明らかに不安定な心の現われでもあります。どうしてそれが分かるのか、ここでご説明いたします。

まず「人生が終わった」という大げさな文末、それに「これからは幸せになれない」という潜在的な不安、そして「今まで」や「日時」という時間描写で明確な区切りをつけてしまう考え方。その全部は、取り返しのつかないドラマティックな経験が心に残した深い傷を丸見えにしています。

この症状の病名はPTSD、つまり、Post-Traumatic Stress Disorder（心的外傷後ストレス障害）で、戦闘体験者の過半数が発症することも先行研究で分かっています^{※1}。自分ではどうしても出来ない圧倒的に強い力に直面したら、その経験がブラックホールのように物事を吸収したり、持ち主の意思とは無関係に経験当時へのタイムスリップを起こしたりします。たとえば、東京の消防車の出す音を聞くと自分がどこにいるか分からなくなります。なぜなら、救急車以外はウクライナの警報サイレンとそっくりの音なので、自分が瞬時に2022年3月のキーウに戻ってしまいます。タイムスリップの他に、自信を失ったり、突然涙ぐんだり怒ったり、周りの人に不信感を向けたり、悪夢を繰り返し見たり、症状は人それぞれです。



日本にいるウクライナ避難者は、PTSDを抱えているのでしょうか。抱えているなら、その割合はどれくらいか、気になりますよね。じつは、皆さんが想像される以上に、はるかに高い水準なのです。それが「日本財団」の定期的に行われているアンケート調査からは見えています。

ここでいう「7月」とは、日本財団に支援申請をした来日済みのウクライナ避難者のうち2022年6月13日～7月27日、アンケート項目に対してオンラインで回答があった調査のことで、アンケート収集数は**260人**です^{※2}。一方、「12月」調査の対象は、日本財団の支援を受けている18歳以上のウクライナ避難者でオンライン回答の収集数は**750人**となっています（実施時期は2022年11月28日～12月12日）^{※3}。

このように、12月調査は、被験者数が3倍くらい多かったからか、様々な不安や困りごとに悩まされるウクライナ避難者の含有率も高いかも知れません。それとも、2022年10月10日以降のウクライナ電力システム等を狙ったミサイル攻撃の絶えない嵐により自身の心的状況を悪化してしまった避難者の増加ぶりが浮き彫りになっているのかも知れません。

7月も12月も、このアンケート調査の対象だった私としては、双方の要因が絡み合っているようには思われず。
(次号へ続く)

※1、https://www.mhlw.go.jp/kokoro/know/disease_ptsd.html（2023年1月4日閲覧）。

※2、<https://www.nippon-foundation.or.jp/who/news/pr/2022/20220729-75587.html>（2023年1月4日閲覧）。

※3、https://www.nippon-foundation.or.jp/app/uploads/2022/12/new_pr_20221215_03.pdf（2023年1月4日閲覧）。

世界に逆行する原子力政策

——GXの愚かさを斬る——

岸田政権は地球温暖化対策やロシア・ウクライナ戦争によるエネルギー危機を理由にGX（グリーン・トランスフォーメーション）なる政策を提示した。その根幹は停止中の原発再稼働や老朽原発の運転延長、さらには次世代原子炉の開発など、福島原発事故を忘れたかのような原子力時代の復活を目指すものである。だが考えれば分かる事だが、実現不可能なこの政策は世界の流れに逆行するばかりか、その場しのぎの言葉遊びの政策でこの国の未来をますます危うくする。

再稼働の困難

政府の第6次エネルギー計画では2030年までに原発のエネルギーを20～22%にする。しかし現在稼働中の原発は美浜3号など9基、今後再稼働予定中の23基が予定通り動くのは困難である。原因は当然ながら福島第一原発事故により安全性対策や自治体の姿勢が厳しくなった事である。例えば、東北電力（3基）、東京電力（11基）、中部電力（3基）等は福島原発事故から12年経過しても再稼働出来ない。今後予想される大地震対策やテロ対策にも膨大な時間とコストがかかり、更に立地自治体が再稼働したくても周辺自治体が反対する例も多い。東電の柏崎刈羽原発は新潟県が再稼働に厳しく反対している。東海第2原発は事故時の避難計画が立たず頓挫したままである。

原発本来の問題点

核燃料サイクルの破綻はすでに明白である。使用済み燃料の再処理を行う予定の六ヶ所村再処理工場は開発が始まってから30年経った今も完成の目途が立たず、最近26回目の完成延期願いを出した。その費用も建設当初は7600億円だったが、最近の延期計画では14.4兆円まで膨らんだ。それでも完成出来るかどうかは疑わしい。仮に完成すれば、使用済み核燃料の再処理で放出される放射性トリチウムは大気中に 1.9×10 （15乗）/年、海洋放出が 1.8×10 （16乗）/年の予定である。これは現在問題になっている福島原発汚染水のトリチウムの総量、 8.6×10 （14乗）の23倍に相当する。これを毎年大気と海に放出する。こんな事を誰が

認めるか。六ヶ所再処理工場は必ず頓挫する。それに伴って何が起こるか。

使用済み燃料があふれる

これまでの稼働で国内原発の使用済み核燃料貯蔵プールはすでに満杯で、再稼働で発生する使用済み燃料の行き場がない。関西電力は青森県に中間貯蔵施設を設置する前提で原発地元に再稼働の了解を取っているが、青森県は厳しく反対している。六ヶ所村の使用済み核燃料貯蔵施設はすでに満杯で受け入れる余地がない。再稼働が始まれば同じ問題が各地の原発で起こる。「トイレのないマンション」をまだ使うのか。貯蔵プールを増設すればコストは更に増える。高レベル廃棄物処分場も決まらない。

新型原発のごまかし

政府は「革新型軽水炉」を提案しているが問題の解決にはならない。現在の100万Kw軽水炉の数分の1～10分の1の小型原発を工場生産しトラックで設置場所まで運ぶという。当然、大量生産しなければコストは回収出来ない。この小型炉を電力消費地（都会など）の地下に設置し、事故が起こればそのまま封じ込めるから安全という。誰がこんな原発を誘致するだろうか。チェルノブイリや福島原発事故の経験を見ないで言葉遊びに過ぎない。新型原子炉を開発中の三菱や日立などの原子力産業はいずれ泣く事になる。かつて経産省に騙され、アメリカのウエスチングハウス社を買収した東芝が倒産の危機に追い込まれた轍を踏んではならない。

（2023年2月2日 河田）

【寄付・会員状況のお知らせ】

- ◆11月 寄付／会費 299,154円
- ◆12月 寄付／会費 840,000円
- ◆2022年度累計（ウクライナ救援基金を除く）
4,437,796円（12月末）
- ◆ウクライナ救援基金 20,523,787円
（2022/3/7～12/31）
- ◆会員数 185名
- ◆ポレーシェ読者数 656名

～心温まるご支援をありがとうございました～

【寄付のお願い】

- ◆一般寄付
三菱UFJ銀行 高畑支店 普通 1682863
- ◆ウクライナ救援基金
三菱UFJ銀行 名古屋営業部 普通 6949211
- ◆郵便振替 00880-7-108610
〈口座名義〉
特定非営利活動法人チェルノブイリ救援中部

*クレジットカードでも受け付けております
（ページ下のQRコードから寄付ページへアクセス！）

※領収書が必要な方はご連絡ください

当団体は「認定特定非営利活動法人」ではございませんので、ご寄附は税額控除の対象にはなりません。
ご了承のほどお願いいたします。

事務局だより

クリスマスカードキャンペーン報告—ウクライナ編

「戦禍のウクライナの子ども達を励ましましょう！」と開始された2022年クリスマスキャンペーン。11月に入りしばらくすると、ぞくぞくとカードが事務所に届いた。そのカードの数々には、戦禍に見舞われているウクライナの子ども達に寄り添い、励まし、そして平和を希求する多くのメッセージが記されていた。「平和の使者」と化した2468通のカードは、11月29日日本を飛び立ち、12月19日、ホステージ基金事務所に運び込まれた。その後、ドンチェヴァさんにより、爆撃を受け移転した25番学校や、12番学校、病院などに届けられた。受け取った子どもたちの様子は、すぐにホステージ基金のFacebookに掲載され、そこには日本からのカードを持つ子どもたちの笑顔が。

また、昨年12月、激しい戦闘があり、全ての発電システムが破壊されたと報道にあった東部・ハルキウ州クビャンシキ地区の子ども達にも、ボランティアの方々によって届けられた。

12月19日、23日、ウクライナの子ども達が作成したカード355通が、チェル救事務所に届き、クリスマスには間に合わなかったが、無事、南相馬の子ども達や子ども食堂の皆さんへと贈ることができた。空襲警報が鳴れば、防空壕や地下に避難しながら作成されたカードか。しかし、見事に明るく、美しいカード。ジトーミル州ホロドク学校の子どもたちからのメッセージを。「私たちの親は戦場で戦っています。私達は、放射能がいかなるものかを知った上に、戦争がいかなるものかを知ることになってしまった。それが、私達は皆さん全てが平和であることを祈る理由です。来るべき年が皆様にとって幸せで成功に満ちた楽しい年でありますよう！」

「クリスマスカードキャンペーン報告・福島編」は次号に。（山盛）



発行 特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部

〒460-0012 名古屋市中区千代田5丁目11-33 ST PLAZA TSURUMAI 本館5B

TEL&FAX 052-228-6813（月・水・金 10:00～15:00）

E-mail chqchubu@muc.biglobe.ne.jp URL <http://www.chernobyl-chubu-jp.org>

印刷 エープリント

